

1

歩道及び自転車歩行者道 (以下「歩道等」という)

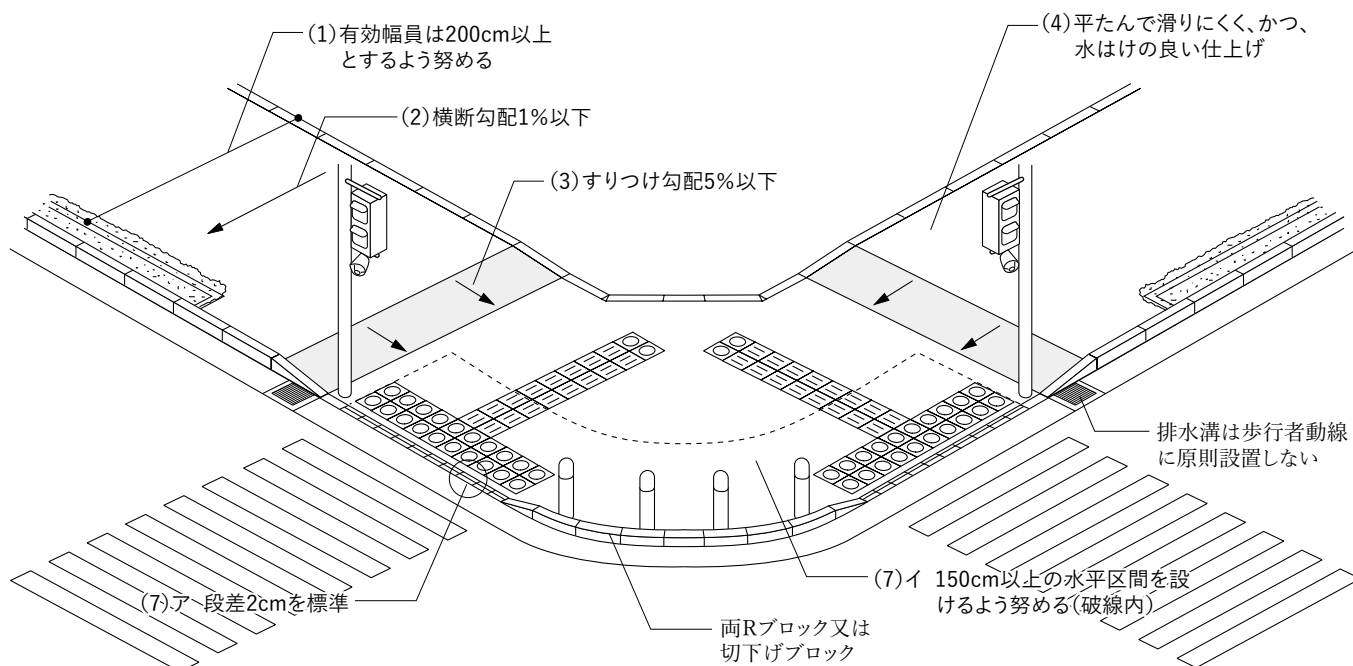
整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、道路施設のうち、歩行者の安全上特に重要な歩道等の整備が必要である。

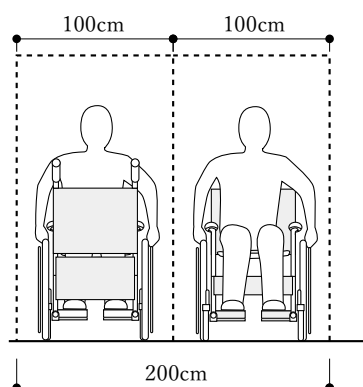
整備基準		解 説	望ましい水準
歩道等を設ける場合は、次に定める構造とすること。			
(1) 有効幅員	有効幅員は、200cm 以上とするよう努めること。	●川崎市道路の構造の技術的基準に関する条例においては、自転車歩行者道の有効幅員は、400cm、又は 300cm 以上である。	
(2) 横断勾配	横断勾配は、1%以下とすること。ただし、地形の状況その他の特別の理由によりやむを得ない場合は、2%以下とすることができる。		
(3) すりつけ勾配	歩道等のすりつけ勾配は、5%以下とすること。ただし、地形の状況その他の特別の理由によりやむを得ない場合においては、8%以下とすることができる。		
(4) 舗装	路面は、平たんで、滑りにくく、かつ、水はけの良い仕上げとすること。		
(5) 溝蓋の構造	排水溝には、つえ等が落ち込まない構造の溝蓋を設けること。		
(6) 車道との区分	車道又は自転車道との区分は、縁石、防護柵、植樹帯等により明確にすること。		
(7) 歩道等と車道の接する部分の構造	歩道等が交差点又は横断歩道において車道と接する部分は、次に定める構造とすること。		
ア 境界部分の段差	車道との境界部分の段差は、2cm を標準とし、かつ、車椅子使用者の通行に支障のない構造とすること。	●川崎市移動等円滑化のために必要な道路の構造の基準に関する条例において、横断歩道に接続する部分は、高齢者・障害者等の交通の状況により、円滑な移動に適した構造とする必要がある場合は、段差を設けず、又はその高さを縮小することができる。	
イ すりつけ区間と車道の接する部分の構造	すりつけ区間と車道と接する部分の間に、長さ 150cm 以上の水平区間を設けるよう努めること。		
(8) 中央分離帯	横断歩道が中央分離帯を横切る部分は、車道と同一の高さですりつけること。ただし、歩行者及び自転車の横断の安全を確保するために、中央分離帯で滞留させる必要がある場合には、車道との境界部分の段差は、2cm を標準とすること。		

□交差点部の整備例

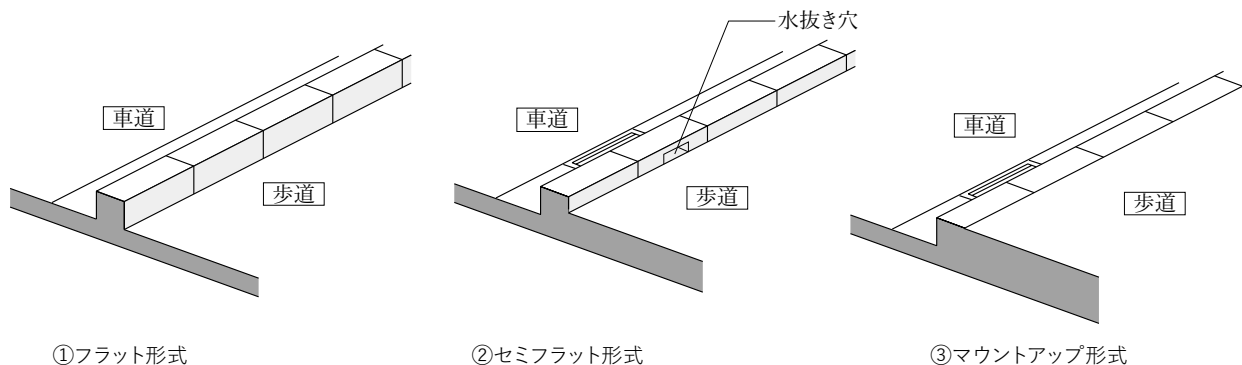
交差点等に接続する歩道等の部分の整備例(セミフラット形式の場合)



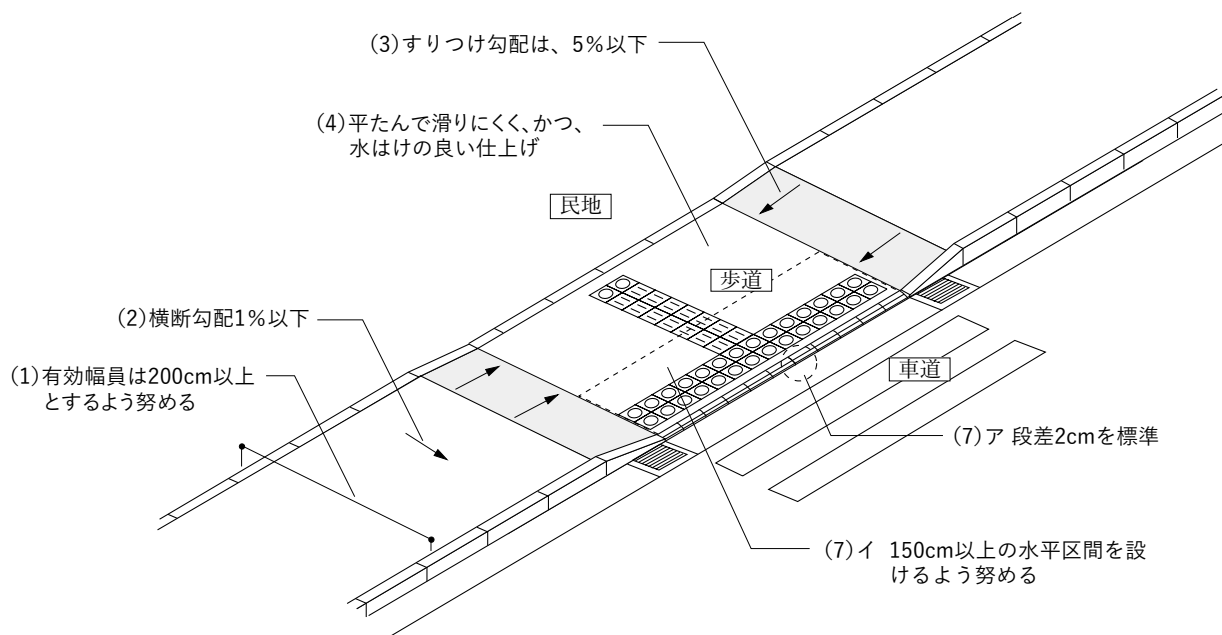
■歩道の幅員の考え方



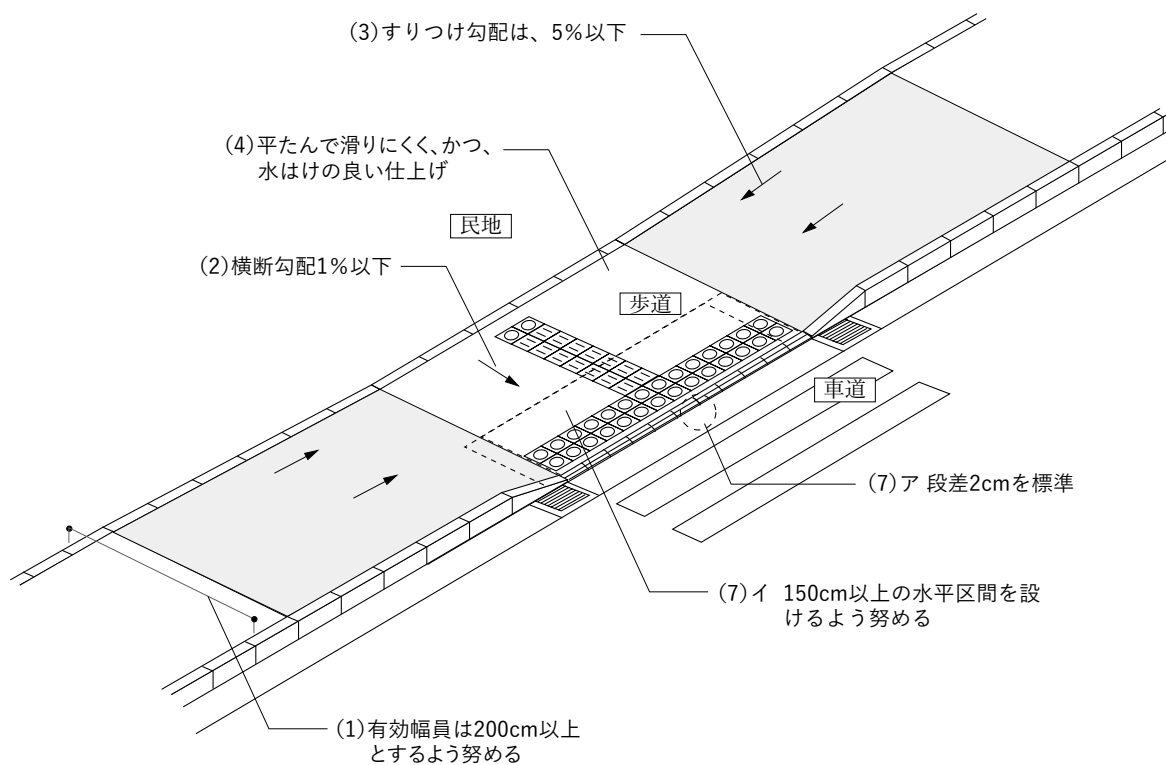
■歩道等の形式



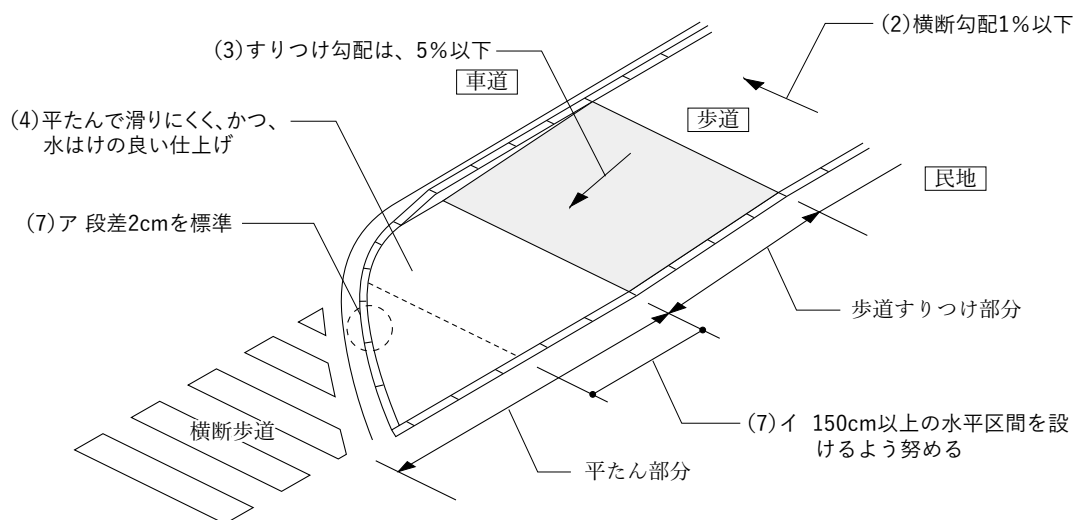
■セミフラット形式の場合



■マウントアップ形式の場合

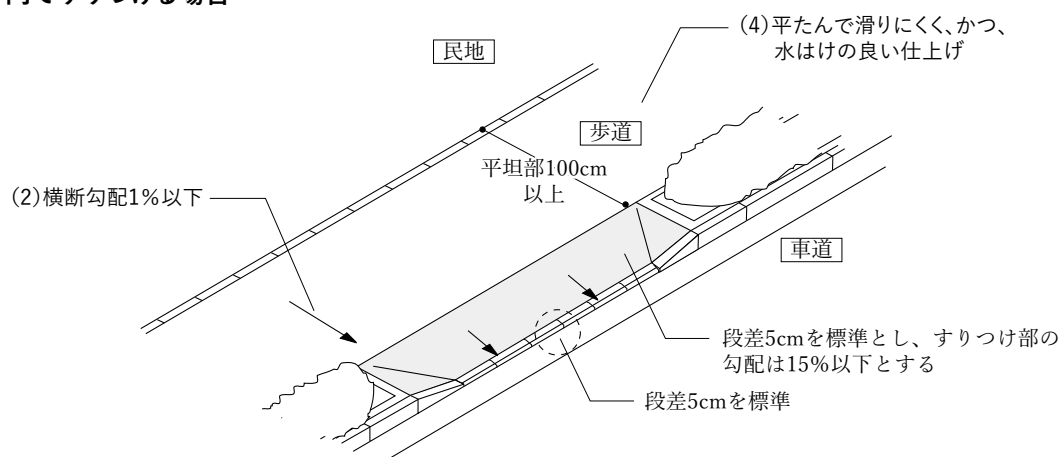


■マウントアップ形式の場合(枝道等との交差部分も含む)

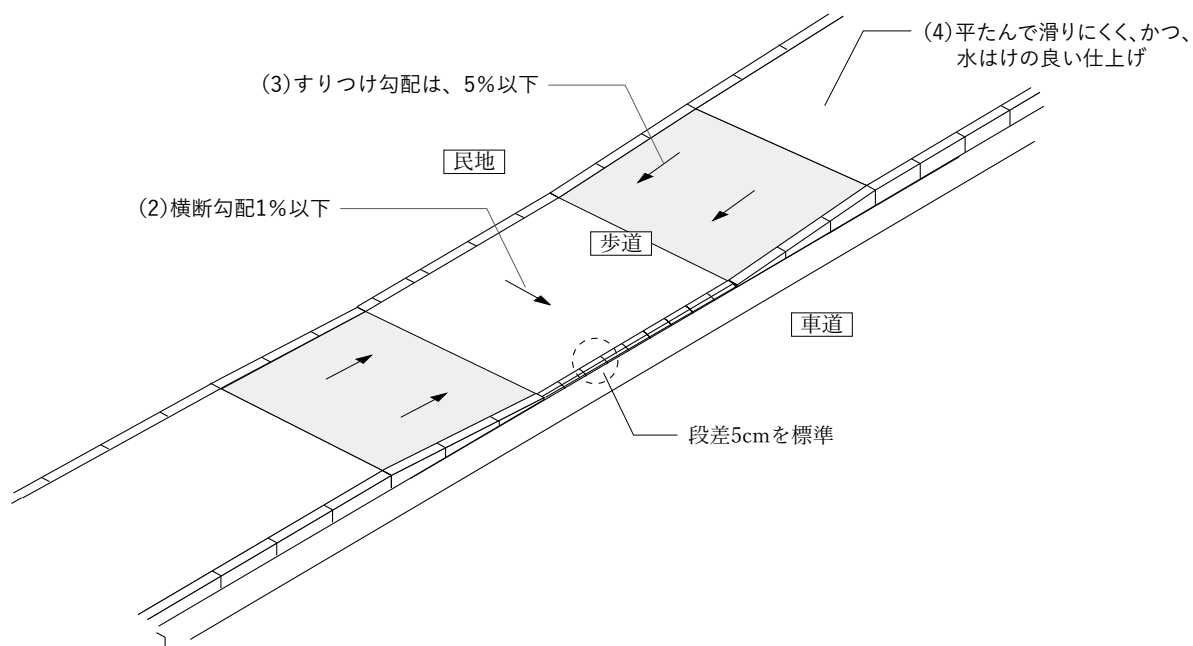


車両乗り入れ部のすりつけ整備例

■歩道等内ですりつける場合

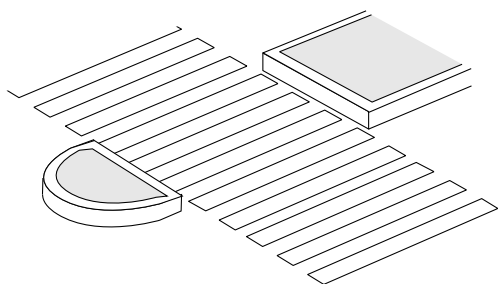


■全面切下げの場合



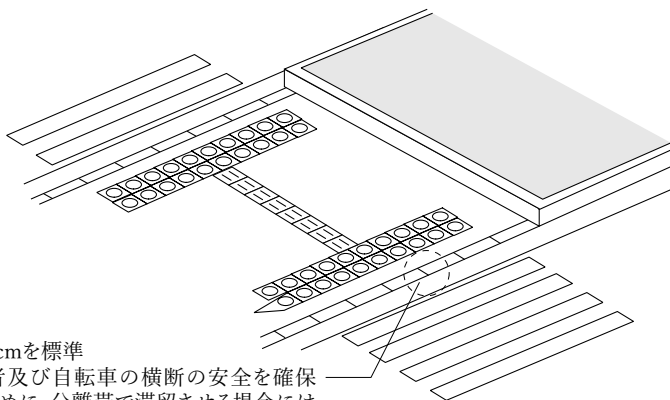
中央分離帯がある場合の整備例

■狭い中央分離帯の場合



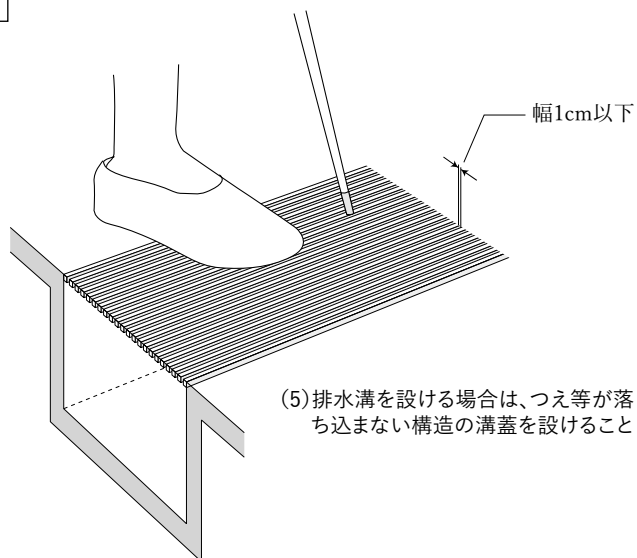
(8)横断歩道が中央分離帯を横切る部分は、車道と同一の高さですりつけること

■広い中央分離帯の場合



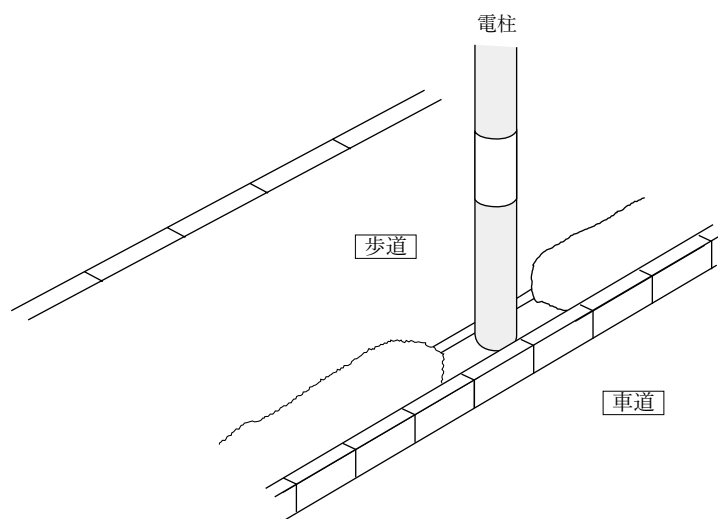
段差2cmを標準
歩行者及び自転車の横断の安全を確保するために、分離帯で滞留させる場合には、その段差は、2cmを標準とする

排水溝の溝蓋の例



(5)排水溝を設ける場合は、つえ等が落ち込まない構造の溝蓋を設けること

やむを得ずに歩道内に設置される場合の電柱の位置例



2

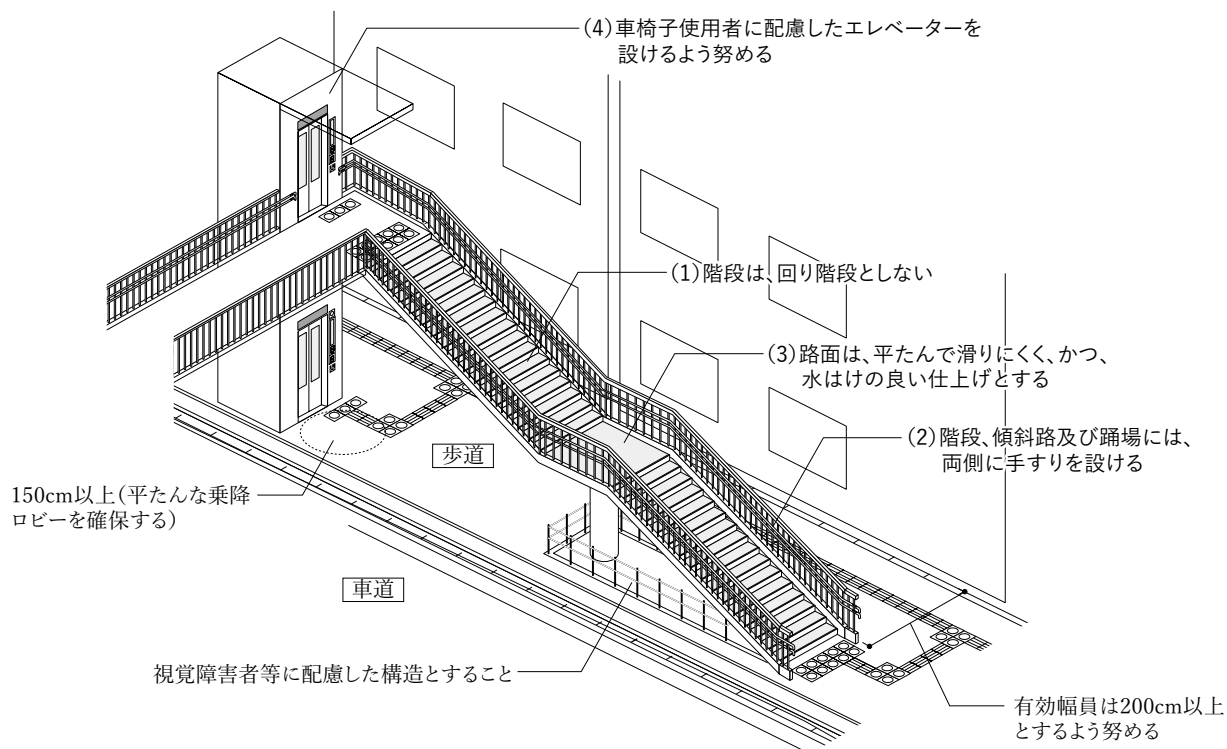
横断歩道橋及び地下横断歩道 (以下「立体横断施設」という)

整備の基本的な考え方

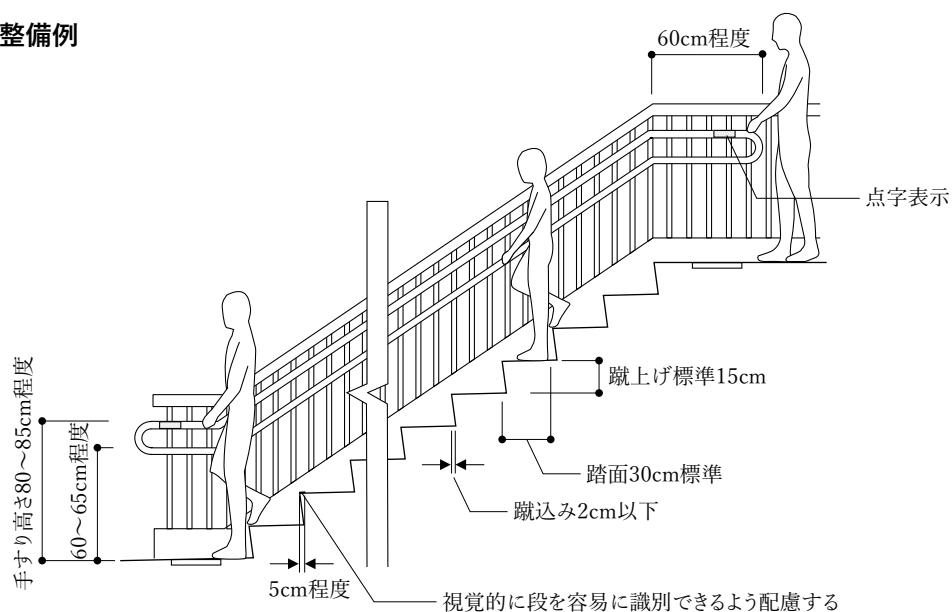
○福祉のまちづくりのためには、道路施設のうち、歩行者の安全に配慮した立体横断施設の整備が必要である。

整備基準		解 説	望ましい水準
高齢者、障害者等の移動の円滑化のために必要であると認められる箇所には、次に定める構造の立体横断施設を設けること。			
(1) 回り階段の禁止	階段は、回り階段としないこと。		
(2) 手すりの設置	階段、傾斜路及び踊場には、両側に手すりを設けること。		
(3) 路面の仕上げ	路面は、滑りにくく、かつ、水はけの良い仕上げとすること。		
(4) 傾斜路等の設置	車椅子使用者に配慮したエレベーター又は傾斜路を設けるよう努めること。		

□立体横断施設の整備例

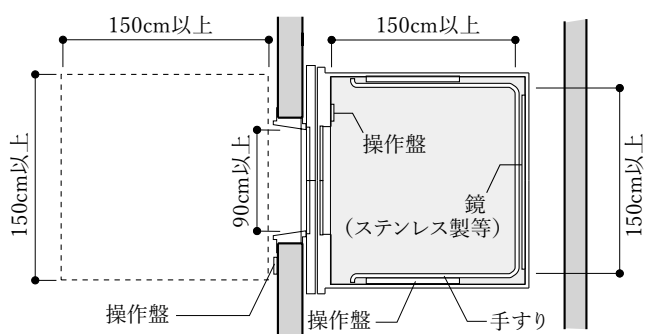


■階段及び手すりの整備例

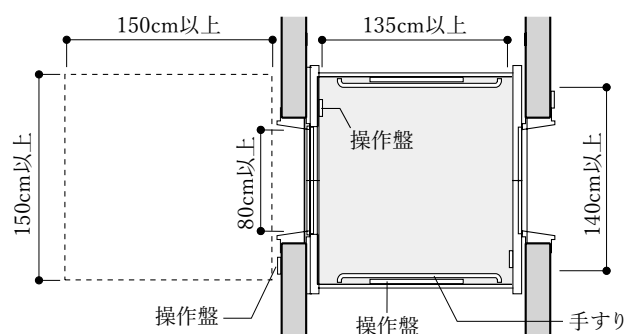


■エレベーターの寸法例

【出入口が1箇所の場合】



【出入口が2箇所の場合】



3

視覚障害者誘導用ブロック

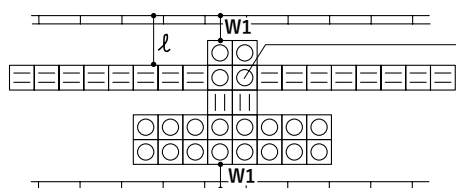
整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、歩道等において視覚障害者を誘導する視覚障害者誘導用ブロックの整備が必要である。

整備基準	解 説	望ましい水準
(1) 歩道等が交差点又は横断歩道において車道と接する部分、立体横断施設の昇降口の部分等の注意を喚起する必要がある箇所には、視覚障害者誘導用ブロックを敷設すること。	●形状、寸法については、JIS 規格に合わせたものとする。 ●ブロックの色は、黄色を基本とすること。	
(2) 公共交通機関の施設から別の公共交通機関又は視覚障害者の利用の多い施設へと通ずる歩道等にあっては、進路や施設の案内を行うことが必要である箇所には、視覚障害者誘導用ブロックを敷設すること。	●「視覚障害者の利用の多い施設」：盲学校、視覚障害者情報提供施設のように専ら視覚障害者の利用に供する施設、市役所、区役所、総合病院等、特に多数の者の利用に供する施設	

■ 横断歩道の敷設例

【継続的直線歩行を案内している場合】

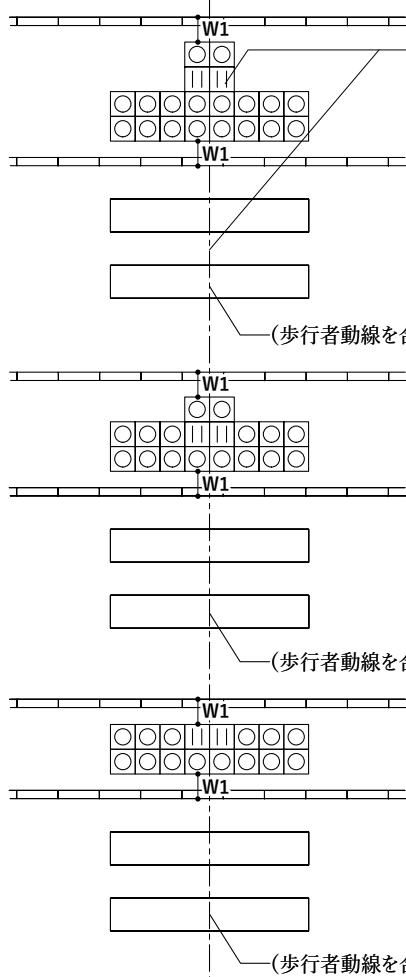


この部分を点状ブロックとし、ここが分岐点であることを案内することとする。

W1 : 30cm程度

λ : 60cm程度(ただし、路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切ではない場合は、この限りではない。)

【歩道幅員が狭い場合】



(歩行者動線を合わせる。)

視覚障害者の動線を考慮して視覚障害者誘導用ブロックを設置する。
動線上にポラード等の構造物がある場合は、あたらないよう配慮する。

(歩行者動線を合わせる。)

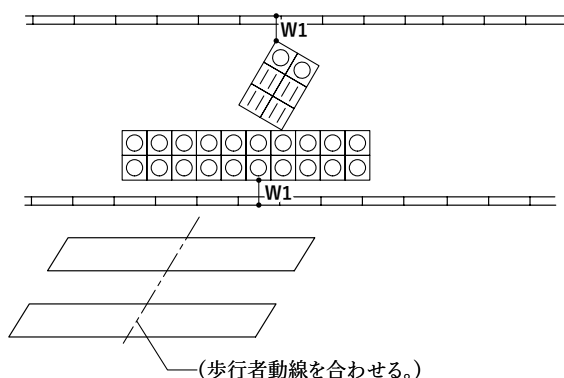
W1 : 30cm程度

注) 線状ブロックで、横断歩道上の歩行方向及び横断歩道の中心部を案内することが望ましい。

(歩行者動線を合わせる。)

(歩行者動線を合わせる。)

【やむを得ず横断歩道が斜めの場合の敷設例】



W1 : 30cm程度

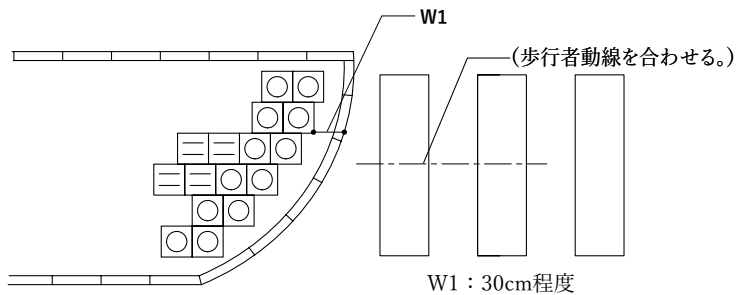
注) 視覚障害者は、視覚障害者誘導用ブロック及び縁石の配列と、横断歩道が垂直に交わるという認識により、横断歩道を横断するという意見があり、横断歩道が斜めの場合の対策を検討する必要がある。

注) 横断歩道の方向と線状ブロックの線状突起の方向とを同一方向にすることが望ましい。

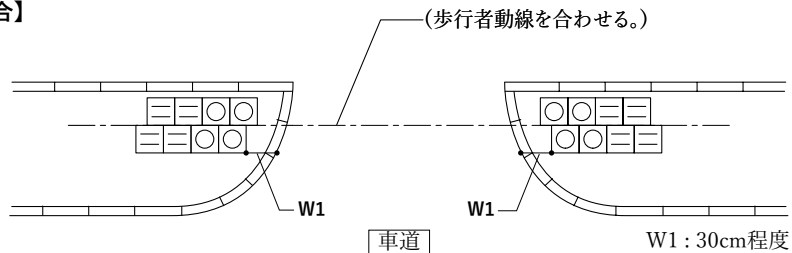
(歩行者動線を合わせる。)

■歩道巻込部の敷設例

【歩道幅員が広い場合】

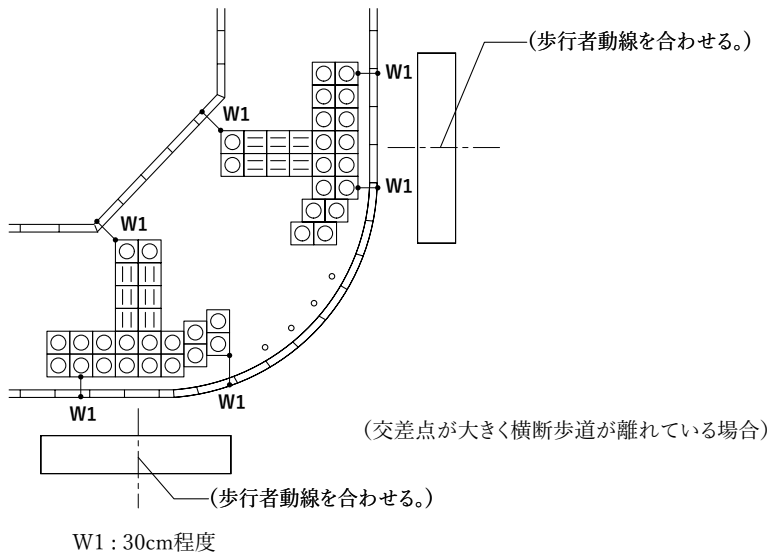


【歩道幅員が狭い場合】

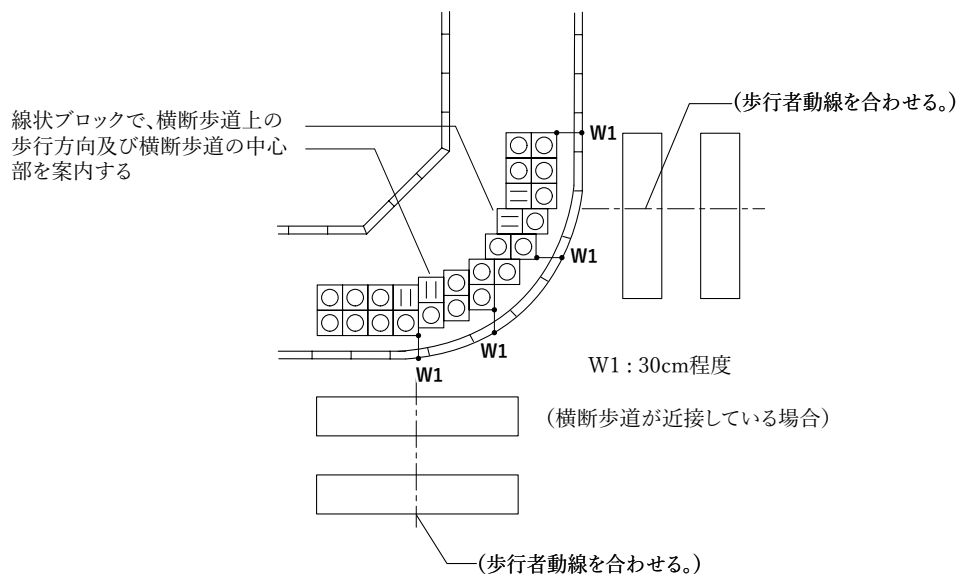


注) 横断歩道の有無に関わらず歩道巻き込み部には視覚障害者誘導用ブロックを設置する。

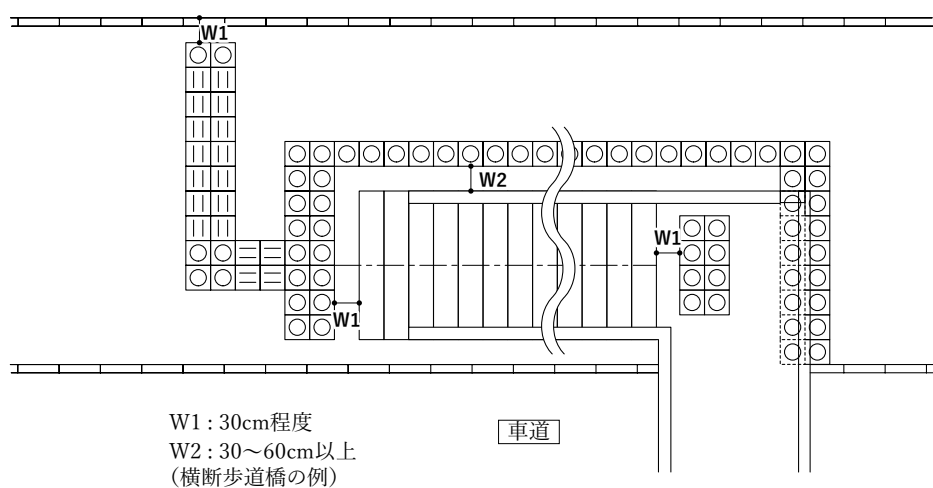
【2方向に横断が生じる場合(歩道幅員が広い場合)】



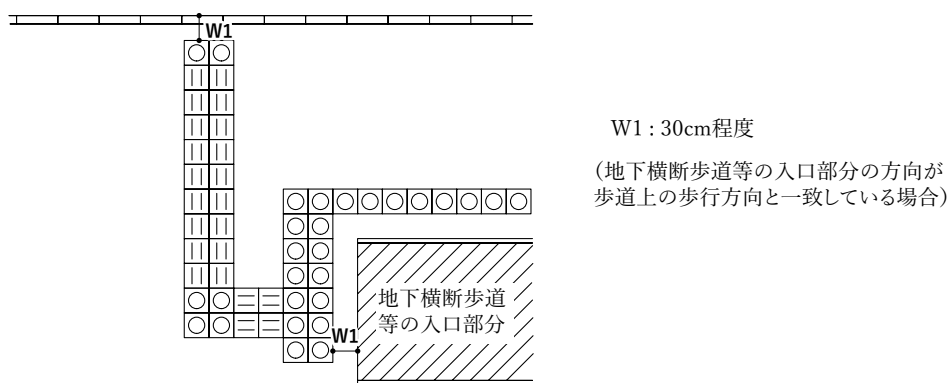
【2方向に横断が生じる場合（歩道幅員が狭い場合）】



■立体横断施設の昇降口（階段部）の敷設例

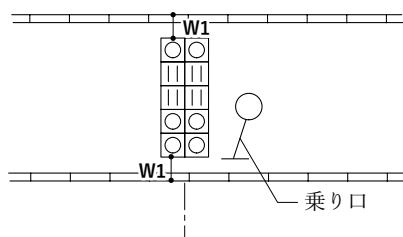


■地下横断歩道の昇降部の敷設例

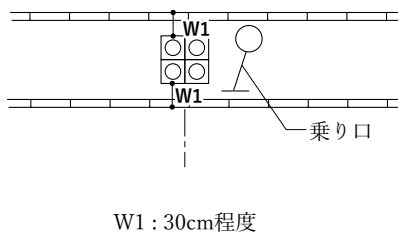


■バス停部の敷設例

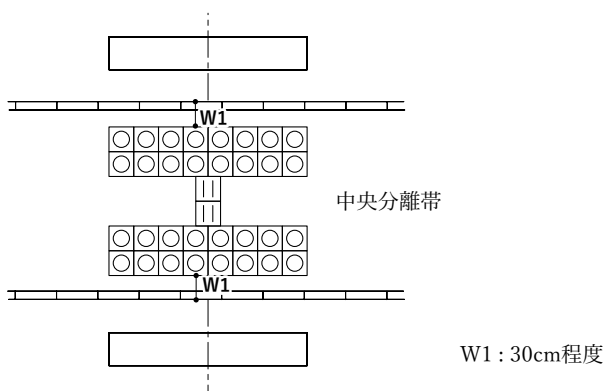
【歩道幅員が広い場合】



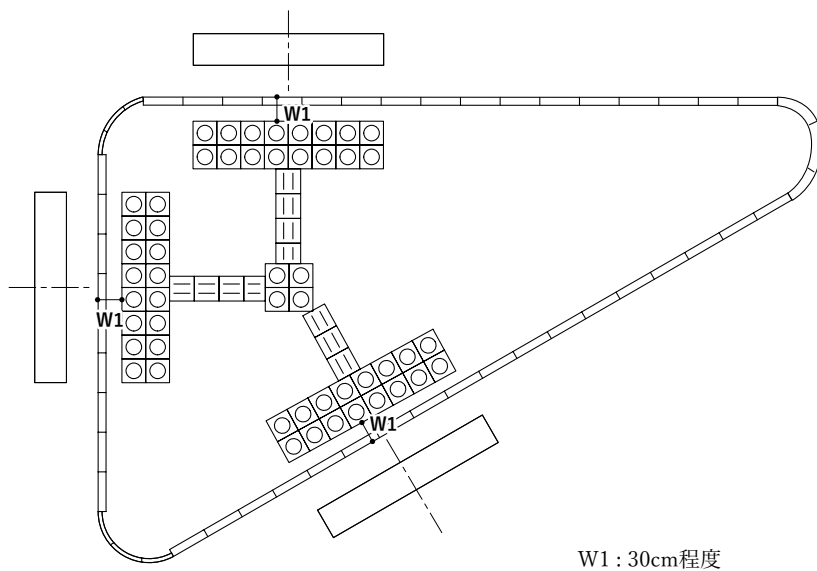
【歩道幅員が狭い場合】



■中央分離帯の敷設例(広い中央分離帯の場合)



■交通島の敷設例





memo

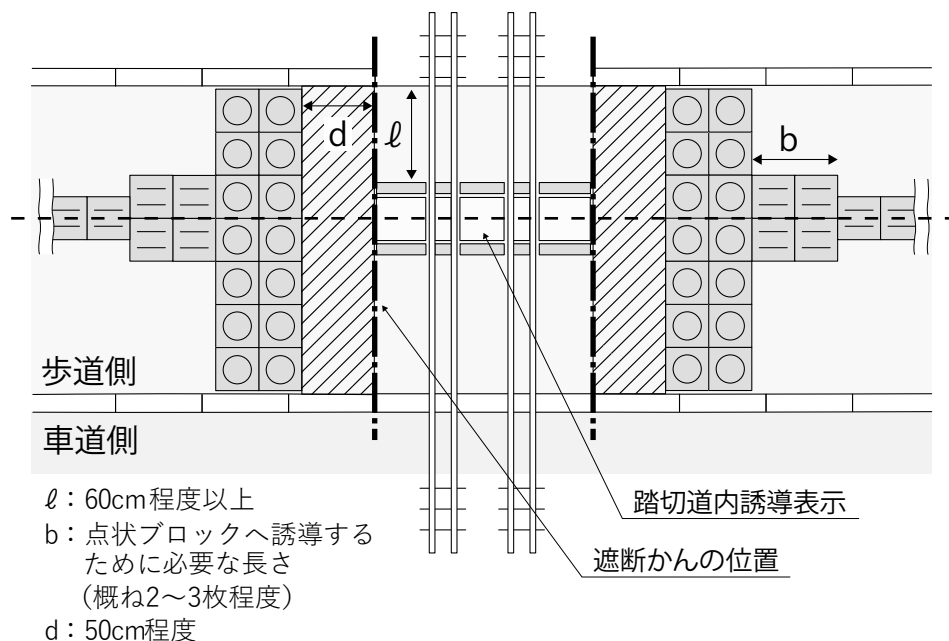
<踏切道での安全対策>

- ・令和4年4月、奈良県内において視覚に障害のある方が踏切内で列車に接触してお亡くなりになる痛ましい事故を受け、踏切道での視覚障害者誘導方法に関する実験を実施するとともに、視覚障害者団体、学識経験者等で構成された「踏切道等における視覚障害者誘導対策WG」等での議論を踏まえ、令和6年1月に「道路の移動円滑化に関するガイドライン（国土交通省道路局）」が改定された。

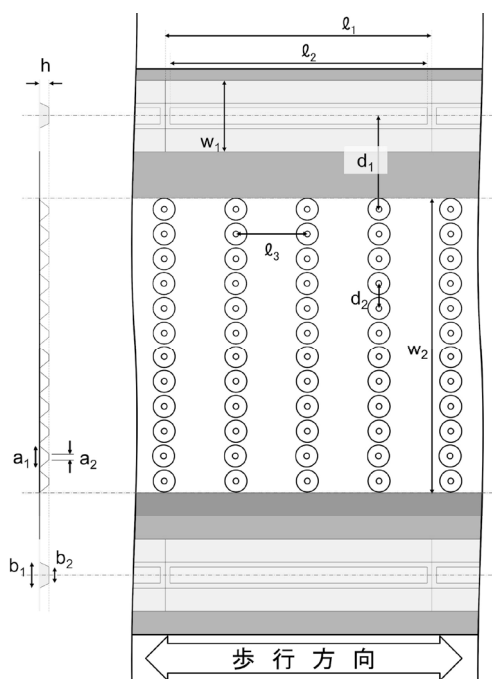
(主な改定内容)

- 1.踏切道内へ踏切道内誘導表示を設けることを標準的な整備内容に位置づけ
- 2.踏切道内誘導表示の標準的な設置方法及び構造を規定
- 3.歩行者通行空間の確保及び路面等の整備を望ましい整備内容に位置づけ
- 4.実証実験結果の紹介
- 5.歩道等が無い又は有効幅員が狭い場合の踏切道での対策等をコラムに記載

<標準的な設置方法等(歩道等の幅員が概ね2m以上の場合)>



<踏切内誘導表示の構造>



記号	項目	寸法(mm)
l_1	線状突起の底面長	$l_2 + 10$
l_2	線状突起の上面長	270 以上
l_3	点状突起の中心間距離(歩行方向)	75
w_1	着色範囲(黄色)	75
w_2	着色範囲(白)	320
d_1	線状突起と最外列の点状突起の中心間距離	100
d_2	点状突起の中心間距離(歩行方向の直角方向)	26
a_1	点状突起の底面径	23
a_2	点状突起の上面径	6
b_1	線状突起の底面幅	$b_2 + 10$
b_2	線状突起の上面幅	17
h	突起の高さ	5

URL https://www.mlit.go.jp/report/press/road01_hh_001742.html

PDF <https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001717788.pdf>

資料：上図全て「道路の移動円滑化に関するガイドライン（令和6〔2024〕年1月）」（国土交通省）p 7-47を加工して作成

4

視覚障害者用信号機

整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、交差点等において視覚障害者用信号機の整備が必要である。

整備基準	解 説	望ましい水準
信号機により交通整理の行われている交差点又は横断歩道において、視覚障害者の横断の安全を確保する必要がある場合は、視覚障害者用信号機を設置するよう努めること。	●「視覚障害者の横断の安全を確保する必要がある場合」の典型的な例として、付近に公共交通機関の施設や視覚障害者の利用が多い施設がある場合、交通量が多く危険度の高い場合などが考えられる。	

5

上屋

整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、バス停留所及びタクシー乗場には上屋の設置が望ましい。

整備基準	解 説	望ましい水準
バス停留所及びタクシー乗場には、上屋を設けるよう努めること。		

